



TITLE:

「天は巻物を捲くが如く去りゆき
」

AUTHOR(S):

海老, 恒治

CITATION:

海老, 恒治. 「天は巻物を捲くが如く去りゆき」. 天界 1924, 4(41): 192-200

ISSUE DATE:

1924-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160071>

RIGHT:

「天は卷物を捲く が如く去りゆき」

海老恒治

聖書には萬物の創始と其の終末(完成)とが共に記されてある。天の創造についても、各所に言及されてあるのを見る。

『天を創造りて之をのべ、地とその上の産物をひらき、その上の民に息を與へ、その中を歩むものに靈を與へ給ふ神エホバかく言ひ給ふ』(イザヤ書四二の五)

『エホバ其の能力をもて地をつくり、其智慧をもて世界を建て、その明哲をもて天を舒べたまへり。』(エレミヤ記十の十二)

『唯彼れ獨天を張り、
海の濤を履み給ふ、
また北斗、參宿、昴宿、

および南方の密室を造り給ふ。』(ヨブ記九の八、九)

是等の諸節には「天」の創造と其の性狀が述べられてある。今茲にその終極について聖書は如何に語れるかを學びたいと思ふ。

さてE.W.モーンダー氏の云へりし如く、「科學は事物の絶對的起源に遡るこゝ能はず、且又その絶對的終末に迄到達するこゝも出来ない。」科學はそれ等について假定し得る。而も

110

斷定するこゝは出来ない。唯萬物を創造し、支持し、再び新たになし得る者の啓示に由りて人は此の二事に關する確たる事實を知ることが出来る。されば科學は聖書に於ける神の啓示を謙遜に受け容れる。而して科學の現在なし得る範圍内に於いては然あるべしと神の啓示を計解するに止まる。

神の言葉は然らば「天」の將來について如何に語るか?

(羔)……第六の封印を解き給ひし時、われ見しに、大なる地震ありて日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面、血の如くなり、天の星は無花果の樹の大風に搖られて生後の果の落つるごとく地に落ち、**天は卷物を捲くごとく去りゆき**、山と島とは悉く、その處を移されたり。地の王たち、大臣將校、富める者、強き者、奴隸、自由の人みな洞と山の巖間に匿れ、山と巖とに對ひて言ふ『請ふ我らの上に墜ちて御座に坐したまふ者の御顔より、羔羊の怒より、我らを隠せ。そは御怒の大なる日既に來ればなり。誰か立つこゝを得ん。』(默示録六十二—十七)

『天の萬象はきえうせ、もろくの**天は書卷の如くに卷かれん**、その萬象のおつるは葡萄の葉の落つるが如く、無花果の枯れたる葉のおつるが如くならん。』(イザヤ書三四の四)

『主よ、なんぢ太初に地の基を置きたまへり、天も御手の業なり。』

これらは滅びん、然れど汝は常に存へたまはん。此等はみな衣のごとく舊びん。

而して汝これらを袍のごとく疊み給はん、此等は衣のごとく變らん。

然れど汝は變り給ふことなく、汝の齡は終らざるなり。』

(ヘブル書一の十一・一二、詩篇百二の二五・二七)

『されど主の日は盜人のことく來らん、その日には天どろきて去り、もろもろの天體は焼け崩れ、地もその中にある工事は焼け盡きん。』(ペテロ後書三の十)

上掲の諸聖句に於いて或は「天」を單數に記され、或は「諸の天」を複數になつて居る。モーンダー氏の記せし如く、天(高き處の意)には穹蒼(そら)なる我が地球を包み、雲を支へ鳥の飛びかふ大氣の部分と、更に高き星のある部分、即ち「天の穹蒼」(re'it hashshamayim)との意味がある。而して穹蒼を譯せられた右の原語は「展開」、「擴がり」、「のべたもの」、「槌で打ちひろげたもの」と云ふ如き意味がある。若し我等が「展開」なる言葉を大氣の天に適用せるものとて吟味するならば、それに深遠な意義を發見する。我等は空氣は二つの瓦斯即ち酸素と窒素(大體に)との混合によつてなつて居るを解して居る。そして我等は凡ての瓦斯は或る方法によつて空間に制限されなければ展がる傾向のある事を知る。更に科學はあゝる瓦斯の膨張は其の瓦斯を組成してゐる各分子の相互に打ち

●合ふ事によつて生ずる事を教へる。かくて大氣を表はす言葉が「打ち延ばす」と云ふ觀念から來つたことの理由を解するのである。新約聖書の用語なるギリシヤ語 *ekpansio* (及び其複數) は第一に、天、諸天、目に見える諸天體と其の凡ての現象を意味し、第二に、空氣、即ち雰圍氣を意味し、その中に雲と暴風雨が起り、鳥は飛ぶ、第三に神、天使及榮化せる人の特別な座位と住所とを意味する。

聖書は今や其の舊新約を通して「天」の終りについて預言して云ふ、天は「卷物を捲く」ことく去りゆき、「袍のごとく疊まる」、「卷物の如くに卷かれん」と。その嘗て創造に際して「のべられ」、「展開され」たものが、或曰「捲かれん」と云ふ、之れ事の性質上有り得べきである。

然らば默示錄六章十四節即ち表題の聖句は果して何を意味するか？ 天が卷物を捲くが如くに去りしめらるゝ事の意味如何？ 明かに大氣に於ける或る大變化を意味せる事、その前節「天の星は無花果の樹の大風に搖られて……地に落ち」中の天が殊に空氣即ち我が地球を包圍する雰圍氣を表はすために用ゐられて居る(流星について述べてある)事から明白である他の一記者はそれを次の如き言葉を以つて記して居る。

『大氣は分たれて、捲き去られたり』(Early Writings P. 41)

或者は之は決して字義的に起り得ない、而して我等はそれが自然的事實として成就されるものと豫期すべきでないこと

ふ。然し何故成就されないか？ペテロは明白な字義的章句中に丁度かかる大氣の天に於ける擾亂に付いて語つて居るではないか？彼は數言を費やして、彼等が分解され（*decomposed*）暴風雨の狀態の如くさるるきを以つて去ることを言つて居るではないか？而して此の事の性質が甚だ重大にして恐るべきが故に、殆ど凡ての預言者達はそれに對して注意を促がし、同じ事實を我等が字義的意味以外に何らかに解する様法外に曲解してはならぬと預言して居る。我等はそれを近世の科學の言葉で以つて記述する事は或は出来ないかも知れない。而して哲學者達は神の預言者達の初心の記述を笑ふかも知れない。然しながら終末に關する凡ての事はそれの中に同じ人智の無力を含んでゐる。而して若し默示錄の記錄の字義的眞實が一つの場合に於いて支持し得ないならば、我等はそれを他の場合に於いても主張すべき理由を見ないのである。神は確かに彼の言ひ給ひし事を見て字義的に成就し得給ふ。而して此處にヨハネは我等に告げて、ペテロ及び他の預言者等が來るべきを告げた事を見たりと云つて居るのである。

今茲に理學士ルカスハリード氏の説明せし所をも併記して些かながら天が「卷物を捲く如く去りゆく」事について明かにし度いと思ふ。

之れ等前掲の句の表示は確かに人目に、現今では不可能である諸天體が展開する事の觀念を有して居る。

我等が星の天の眺望に大氣の影響を考へに入れて來る時に我等はそれが天文學者達の注意せなければならぬ事柄であるのを知る。大氣中には多少煙があり、少くも塵埃の分子が浮遊して居つて、視力を或る程度迄不明瞭にする。又彼方には種々密度を變ずる大氣の層がある。そして凡て是等のものは相共に星々の眺めを妨けて若し然らざれば可能なるべきシーイング（*seeing*）を不良ならしめるものである。

嘗て大きな廓大力の望遠鏡を用ゐて諸星を研究しようとした事のある人は諸天體の固有の眺めを得るのに遭遇する困難のあるものをよく知つてゐる。或る者は適當な時を求めて幾夜も幾夜も待つが、而も全く失望に終る。普通の天文臺にまつては、天文學の研究に適當なのは一年に比較的僅かの夜しかない。屢々觀測者が望遠鏡の接眼鏡を通して眺める時に光波は氣流の爲めに影響を受けて望遠鏡の對物鏡を通過し、星をして混亂にして不満足な有様に躍らせる。凡て是等の事は大氣が或程度迄、若し然らずば我等が得べき天の眺望を不明瞭にする事を示すものである。甚だ多くの天文學的觀測所が高い山頂に位して居るのは大氣の困難に由るのである。高山に於いては大氣は密度少なく均一で熱の流の爲めに影響を蒙るこゝ少く、且つ都市の塵埃と煤煙のために不鮮明にされる事も少い。山中の乾燥した、高所の空氣の中にあつては天文學者等は戦ふべき困難が遙か少くして容易に其の義務を

遂行し得るのである。

天文學に關する記者で同時に自ら觀測者なる或る著書が、山頂天文臺に於ける仕事に關して次の如き記述をなして居る彼曰く

『何人か^{クワイヤ}「透徹」なる語の意味を知る？何人も谷間に住めば「透徹」の意味する所を了解する事を得ないであらう。此處のエコー山上にては大氣はいこも透明にして星々は手で觸れ得る程近く見え、山の空氣は驚くべき程純潔である。星群は水平線近くの何處に住む人々にも全く知られない光輝を以つて輝く。夥多の降雨の直後を除いては、凡ての時に、地球を取巻く塵埃の包圍物は山頂の下方に見える。それは汎く景色を蔽ひ、海に迄及んで居る。山頂にある我等にまつては、時々凡ての人類が塵埃の此の層の中で窒息しさうに見えるのである。』

『夜になれば我等の上にはシリウスミゼガが巨大なダイヤモンドの如くに輝く、アルクチュールスミスピカも同様に輝く。而して就中巨星太陽なるカノープスは遙か南方に驚くべき光輝を以つて閃きつゝ太平洋に搖ぐ無數の波浪の峰の上に其光線を輝かして居る。天球中に於ける此の最も光強い星は北緯四十度の邊からは見る事が出来ない。オリオン、ヘルクレス及び大熊の如き莊大な星座は甚だ美麗にして筆紙に盡し得ない。銀河の見かけ上近い事を見るのは驚異すべき程で

ある。山の景色、空氣の純粹及一年の三分の二の間水蒸氣から解放されたところは相結合して視力の幻覺を形作る。時々此の虚偽的影響は夜間の螢氣樓に似よる。そして人は眞に星々の間を歩んで居るかの觀がある。』

『此の地では「人を魅せしめる時」は日暮である、太陽は密柑ミ花ミを乗せた平野ミ彼方の水の荒地に没する、冬至の頃太陽の視表面が海の上に立つて居るのが見える。忽ち偉大な球の半のみが見得る。最後の光景はアークライトにも比すべきである。それから一つ又一つミ一等級の星が見え初めて遠方の峰々の間に閃く。太陽の最後のひらめきが消える迄にはアルデバラン、アルタイル、リゲル及びプロシオンが天空を照らす……………」』

『床を眞黒の天鵞絨をもつて敷きつめ、その上に無數のダイヤモンドを無秩序にまきなさい、さすれば多分かの濃密に群がった銀河が天文臺から如何に見えるかを讀者は想像し得るでせう。』^{幾百萬}「幾百萬」は天文學的には陳腐の語彙なり^{幾十億}「幾十億の星」ミは銀河の眞相を更によく物語る表現である。幾十億の太陽が銀河の無窮の深淵に顯現してゐる。是等が自然ミ星辰構造の基礎である現はれたる宇宙の床を形成して居る。數百の區域に於いては、そこには更に多くの星の爲めの餘地も早やない様に見える。數百萬は多くのめ針の先よりも美はしく、之れ等は星の砂からなる補道を作りなしてゐる。』

『私は此處の山上の望遠鏡で見る迄は此の恒星の床を眞實に見なかつた。數日の雨の後には、大氣は塵埃をきれいに掃き清められる。その時には人は望遠鏡が急に測られぬ星間の罅隙——戸口或は窓にしてそれを通して空間の眞の底を見かけ上のぞく——の上を過ぎる時に觀測者は眞に宇宙的深淵の内部にある。是等の區域は絶對的に暗黒である。山中の夜半時に於ける星辰探求の全範圍中、星辰の床の中に於ける深淵の幻影ほど完全に匹敵し難い感じはない。是等の眞黒な荒地の邊りには、星が數層に積み重なり、幾窓にも集められてゐる、換言せば多くの把、多くの射光、多くの線狀の射光及び飛沫に散布されてゐる。而も凡て是等の星辰の諸群の中最も小さい點も白熱せる太陽であつて、我等の小さな恒星——太陽——よりも大きなものである。オリオンの巨大な星雲は星をもつて出來たレースの一塊でギラ／＼輝く多くの點にて裝はれた一つの織物である。』

聖書に於いて、或日此の幕が除かれるこの記述がなされてゐる。我等は此の不明瞭ならしめる幕が如何にして除かれるかを告げようとする事は出來ない。然しながら全く明かな事は、それは創造者の能力による事である。其の記述は甚だ急激に起るものについての叙述である。天は「卷物の如く」に捲き去らるるであらう、或は先に引照せし記者のそれを述べたる如く、天は「分たれて去り行く」であらう。

我等は一つの説明を用ゐよう、諸君が強靱な紙の一巻物を持つて居るを想像せよ。是れは、若し速かに釋かれて展べられるならば、その原の位置に捲かれるまでに捲かれ居た。さて此の一枚の紙が各の端を手で擴げて支へられたを想像せよ。かくの如く支へられた紙が急に中央から裂かれたを想像せよ。我等は此の二つの半分は其の間に一つの開口を残して迅速に分れて捲かるべきを知つて居る。之れこそ神の言葉に由つて我等のために描かれた畫——終末の日に起るべき事件に關する繪畫なのである。

神が「光あれ」と曰ひし時に、忽ちに光が生じた。彼れ語り給へば、なつたのである。主が自然に命じ給ふ時に、それは忽ち彼に従ふ。彼處には相容れざる意思にては無く、内部からの反對する能力にては存しない。自然は絶對的に從順である。それは創造的の言に無條件に服從して直ちに呼應する。而してかく、神の聲が天と地とを震はせる能力を以つて語る時に（ヘブル書十二の二六——二八）大氣は凡て其の幕の如き能力、其の不明瞭ならしめるカーテンの結果を除く所の一變化を遂げて、我等は我等の上なる輝く宇宙に更に接近せしめられた事を直ちに認識するであらう。

此の事は一つの創造的行爲に由つて視力を妨ける大氣中の凡の物の取り除かれる事を意味するに相違ない。空中には絶えず水蒸氣の多量が存在してゐる。是等は見かけ上は目には

見えないけれども、視力を不明瞭ならしめるに與つて力がある。水は速かに電氣の電解の如き能力に由つて見えない水素と酸素とに變化せしめられるかも知れない。或る未知の而も可能なる類似の過程によつて、大氣中の凡ての水は水素と酸素とに變化せしめらるゝ事により迅速に取り去らるゝであらう。或はそれは我等には未知の或る過程に由つて、雲に凝縮させられて、地球の人間の住居して居る部分でない他の部分を包む寒圍氣の部分に移轉されるかも知れない。然し吟味中の言葉が如何に意味しようとも、それは確かに大氣の驚く可き程の清淨化を指し示めすものである。

演劇が始まらうとする直ぐ前に、幕が開かれる。時として幕は定めの際に開かれない事がある。オーケストラが奏せられる。然し聽者はだまざるべくもない。彼等は演技は幕が開かれる迄始まらない事を知つて居る。幕が開かれる時に、彼等は演劇はそれから開始される事を知る。忽ち役者は現はれ、其の場面は活寫されるであらう。

六千年間、此の世界は宇宙に對し、又人類に對して舞臺であつた、然し各時代の終に於ける、演劇の最終の大幅は光景の變化を包含してゐる。此處なる地上では、數千年の間、人類は、場合により或は巧みに或は賤しく其の役割を演じた。人間が語る間は神は沈黙を保ち給ふ、時間に左右される事物が見える間は、神は人目に現はれず止まり給ふ。然し今や

人類は威大なる見えざる勢力に相接觸する様に導かるゝのである。彼等は未だ曾て無い、未見の大世界を見ようとして居る。彼等は、開かれた幕を経て、各時代の間彼等の視界から蔽はれて居たものを驚きつゝ見ようとして居る。

而してかく、時の終末に當つて、天空の大いなる幕は捲き去らるゝであらう。それが捲き去るに至るやそれにつれて凡ての眼は知らず識らず上を見るであらう。或る懼るべき事が將に天に起らんとして居る。大氣が分たれて捲き去らるゝや否や、云はゞ、人々は星々の中央に持ち來らされる。それ故に現在では是等天體の光は人の眼には、破れた不定の閃光と輝くものが、其の時には、復讐者の眼の如く強く輝く光として光輝を發するであらう。凡ての星は、數千哩も近くなつた様に見えるであらう。現在は遙か遠方に見えて、ほんやりと定かならざるものも、其の時には、疎然たらしめる程に差迫つて來るであらう。星々は現在は大氣によつて不明瞭にされて居り、それ故に眼に見えないが、その日には現在では何物も見えない所に數千のダイヤモンドの如き光點を顯現せしめて、清澄なる確固たる光線を輝すであらう。而して爲めに天空の偉大なる宇宙は忽ちにその星の數を増し、數百千も其の數を増加し、各々はより近く、より明瞭に輝き、より確固と輝いて、誤解する事の出来ない風にその物語を告げる様に見えるであらう。而して自然の幕の下に數年間生存した人々に

は、此の自然の幕が俄然除かれて、神の偉大なる宇宙の無限の富に榮光に自ら相對峙せしめられたのを發見するのは喫驚すべき事あらう。

然しながら空氣の幕は人類に三つて單に星や星團を眺める爲めに除かれないうであらう。然り、遙かにそれ以上の偉大な意義ある光景が驚ける人目に現はれんとしてゐる。遙か彼方に、而も地上の住民の眼にまがふべくもなく人の子の兆が現はるゝであらう。最初、それは人の手にも足らない大さに見えらるであらう。天から流れ来る榮の光に比べてはそれは暗く見えるであらう。然しその形は誤るべくもないであらう。凡ての眼はそれを人の子の兆として見るであらう。斥けられた然も地の審判主なるキリストが來りつゝあるのである。

彼は彼の父の凡ての榮光を以つて輝かざるゝであらう（マタイ傳十六の二七）彼は彼れ自らの超自然の美をまこふて來りつゝある、而して彼と共に榮光の宮殿から凡ての輝く戰士——凡ての天使——が扈從するであらう（マタイ傳十六の二七、ユダ書十四、十五）それが爲めに此の偉大なる從者等が天から地上へ悉く降る結果として天は靜かになるであらう。默示錄八の一參照）

神が天の幕を取り去り給はんとするのは、人をして此の光景を目撃せしめんがためなのである。それは人間が神の子の來臨を妨げなく見んが爲めである。各時代の間、彼の言葉は

質して置かれてあつた——「諸衆の日彼を見ん」（默示錄一の七）を、而して其の言葉にたがはず、凡ての日は彼を見るであらう。

彼を斥けた人々が此の恐るべき光景を見るや、狼狽へ、おそれ、膽を失ふであらう（ルカ傳二一の二五）嘗て、彼れその腕には救を齎す者に祈つた事のない者も、今や、山と巖とに對つて、彼等の上に墜ちてその存在が彼等を破壊させる彼の前から永久に隠し去らん事を乞ふの祈禱を上げる。彼等は過去の罪惡の結果を免がれん事を欲するであらう、或は此の日に背いて自ら積み上げた恐るべき怒を避けようと思ふであらう。或る者は自ら其の罪の目録を永久的暗黒に隠さん事を欲するであらう。それ故に、地の破壊された表面が其時彼等の前にあるを幸ひに洞や山の巖間や裂目に走るであらう。然し最早時遅し。彼等は彼等の罪を隠くすことも出來ず、永く延ばされた報復（むくみ）のがれる事も不可能である。

彼等が決して來らじと考へた日は遂に緇（くろ）の如くに來つた。

而して彼等の悶えた心から無意識的に發する言葉は「御怒の大なる日既に來れり、誰か立つこを得んや？」（默示錄六の十七）之れである。此の時の恐ろしい光景によつてその叫が起らない前に、諸君に對つて此の問題に重大な且つ眞摯な注意をばらはれん事を祈る。

多くの者は今、祈の會合を輕蔑するが如くである。然し或

る時至れば、凡ての人類は祈るであらう。(默示録六の十三) 現在、悔恨の中に神に對つて祈らない凡ての人々は、其の時巖や山に對つて失望の中に祈るであらう。而して之れこそ會て開かれた最大の祈禱會であるであらう。

彼れを受け、地に在つて彼の爲めに生き、義の爲めに證を立てた人々でさえも、此の能力ミ光輝ミの威嚴ある光景には喫驚するであらう。然しながら此の偉大なる天からの行刻に先立つて彼等にキリストの言葉がいさも稀な樂音の如く「我恩恵汝に足れり」ミ響き来るであらう。その保證に力づけられ、其の能力に堅められて、彼等はかく云ふ事が出来るであらう。「さればたミひ地はかわり、山は海の中央に移るこも我等はおそれ、よしその水は喝りミろきてさわぐこも、その溢れ來たるによりて山はゆるぐこも何かあらん」(詩篇四六の二、三)ミ。勝利の叫びを以つて彼等は絶叫するであらう。「此れは主なり、我等彼を待ち望めり、我等彼の救を喜び歡ばん」ミ。

友よ、天の卷物を捲くが如く去り行き、キリスト榮光の中にありて來り給ふミ云ふ、之れ或は今日の科學から見て迷妄であるかも知れない。然し記憶せられよ、イエスに關はれる預言は其の大部分歴史に於いて成就した。而して其の事は新約聖書にあからさまに何等粉飾せずして記録されてある。而して更に彼に關はる預言は刻々成就しつゝ、又、成就せんミしつゝ

ゝある。けに歴史は預言の成就せるものである。然り、而して聖書はキリストに付いて證するものである。(ヨハネ傳五の三九)彼は聖書(舊約聖書)に應じて、我らの罪のために死に、また葬られ、聖書に應じて三日目に甦り、その使徒を始め、他の弟子達に少くも十四回は現はれ給ふた事が記録されてある。而して弟子達の見るが中に天に擧げられ給ふて、雲これを受けて見えざらしめたりミ記さる。最後に多島海の一孤島バトモスの島に流刑の身にありしヨハネに顯現し給ふて、本題を含む大預言——彼ミ彼の教會の現在ミ將來につき、殊に彼の再臨ミ其の前後の出來事につきての默示を與へ給ふた。

凡ての人よ、諸の被造物よ、聽け、一度天を通りて神の寶座に迄昇り給ひし此の同じイエスは再び又此の地に來り給ふなり。神の正義は之れを必要ミする。イエスの十字架は之れを招來する。神の愛ミ熱心ミは之れを成就し給ふ。彼れに救はれし者、世の罪を除く神の羔羊を視て今信する者等は彼を待ち望む。萬物は切に慕ひて彼ミ神の子たちの顯現を待つ。正しき審判の行はれ、正邪の判別、一切事のべく、りがせられて、神の御國が此處に榮光をもて出現せんが爲めに、必ずや王の王、主の主、救主にして審き主なるキリスト、イエスの御來臨は不可缺である。此の宇宙的大事件の除幕ミして天——我が地球の雰圍氣——の卷物を捲くが如くにして取り去らる

、事、之れ我等の本文に於いて學びし預言である。(以上)

隱微^{かくれ}たる事は我らの神エホバに屬する者なり、

また顯露^{あらは}されたる事は我らと我らの子孫に屬し、

我らをしてこの律法の諸の言を行はしむるものなり。

(申命記二九の二九)

エホバ言ひ給ひけるは我が爲さんとする事をアブラハムに
隠すべけんや。アブラハムは必ず大なる強き國民となりて天
下の民皆彼に由りて福を獲るに至るべきに在らずや。其は我
れ彼をして其後の兒孫に家族に命じ、エホバの道を守りて
公義と公道を行はしめん爲に彼を識れり。是れエホバアブラ
ハムに其會て彼に就きて言ひし事を行はん爲めなり。

(創世記十八の十七—十九)

視よ、彼は雲の中にありて來りたまふ、

諸衆の日、殊に彼を刺したる者これを見ん、

かつ地上の諸族みな彼の故に歎かん、然り、アアメン。

(默示録一の七)

我また新しき天と新しき地を見たり。これ前の天と前の
地とは過ぎ去り。海も亦なきなり。我また聖なる都、新しき
エルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、
神の許をいで、天より降るを見たり。また大なる聲の御座よ
り出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人ご偕にあり、
神、人ご偕に住み、人、神の民となり、神みづから人ご偕に
在して、かれらの目の涙をこごこしく拭ひ去り給はん。今よ
りのち死もなく、悲歎も、號叫も、苦痛もなかるべし。前の
もの既に過ぎ去りたればなり。』斯くて御座に坐し給ふもの言
ひ給ふ『視よ、われ一切のものを新にするなり。』また言ひた
まふ『書き記せ、これらの言は信すべきなり、眞なり。』

(默示録二十一の一—五)

都は日月の照らすを要せず、神の榮光これを照らし、羔羊
はその燈火なり。

(默示録二十一の二十三)